

藤原京跡IV

—右京十二条一坊—

2013年3月

奈良県橿原市教育委員会

序

藤原京跡IV－右京十二条一坊－の発掘調査報告書を『橿原市埋蔵文化財調査報告 第8冊』として刊行します。

本書は平成24（2012）年に当市教育委員会が分譲宅地造成に伴い実施した、藤原京右京十二条一坊における発掘調査成果をまとめたものです。

橿原市の東部から桜井市、明日香村にかけての地域には、日本初の本格的都城である藤原京が広がっています。藤原京の調査は当市の他、奈良文化財研究所や奈良県立橿原考古学研究所、桜井市教育委員会、明日香村教育委員会や（財）元興寺文化財研究所によって実施され、藤原京や藤原宮の規模や構造のみならず、人々の暮らしにいたるまで、数多くの発見がなされています。

今回の調査は、藤原京の中でも、南端に近い宅地の調査となります。調査では、古墳時代から鎌倉時代まで、断続的に谷を埋めて盛土造成を繰り返したことが明らかとなりました。

本書が広く活用され、当地域の地域史だけでなく、藤原京の、ひいては日本における都城制の解明に役立てていただけることを願ってやみません。

最後になりましたが、現地の発掘調査の実施や本報告書の刊行にあたって御協力いただいた関係諸氏ならび諸機関に厚く御礼申し上げます。

平成25年3月27日

橿原市教育委員会
教育長 吉本重男

例　　言

- 1 本書は、奈良県橿原市和田町に所在する藤原京右十二条坊（ふじわらきょうとうきょうじゅうにじょういちぼう）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、奥山務氏より分譲宅地造成に伴って提出された埋蔵文化財発掘届出書に基づき、奈良県教育委員会の指導のもと奈良県橿原市教育委員会が実施した。
- 3 現地調査期間は、平成24(2012)年4月3日～同年5月11日である。調査面積は、77.2 m²である。
- 4 現地調査時及び整理時の体制は、以下の通りである。

橿原市教育委員会 生涯学習部 文化財課　　生涯学習部長 田原勝則、副部長 西川明秀
文化財課長 竹田正剛、課長補佐 濱口和弘・中川明彦 統括調整員 平岩欣太、事業調整係長 米田一、主査 松井一晃（現地調査・整理担当）
- 5 現地調査及び整理にかかる費用は、原因者が負担した。
- 6 現地調査及び整理の実施にあたり、地元及び関係者各位の多大な御協力を賜った。感謝申し上げたい。
- 7 出土遺物をはじめ調査記録は、橿原市教育委員会で保管している。
- 8 本書所収の写真のうち、現地調査写真は松井が撮影した。遺物写真はアートフォト右文 佐藤右文氏が撮影を行った。
- 9 橿原市教育委員会では調査年度を西暦で表し、その年度内に行われた調査名称を年度－調査次数の形で示している。今回の調査に対しては橿教委 2012－1次調査という番号を付している。
- 10 出土遺物や各種図面・写真等の調査記録一式は、橿原市教育委員会において保管している。調査記録一式には橿教委 2012－1次の番号を付している。
- 11 本書の編集及び執筆は松井が担当した。

凡　　例

- 1 本書で示す方位は全て座標北である。座標は世界測地系による平面直角座標第VI系に基づく。
- 2 図中の標高は東京湾平均海面(T.P.)からの値である。
- 3 遺構番号は、全て調査時のものを使用している。
- 4 掃図中の遺物番号は、写真図版の遺物番号と共に通している。
- 5 断面図のトーンは地山を示す。
- 6 遺構図及び遺物実測図の縮尺は、各図に明記している。
- 7 写真図版の縮尺は任意である。

目 次

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境 ······	1
第1節 地理的環境 ······	1
第2節 歴史的環境 ······	2
第Ⅱ章 調査の概要 ······	5
第1節 発掘調査に至る経緯 ······	5
第2節 発掘調査の方法と経過（調査日誌抄） ······	5
第Ⅲ章 発掘調査の成果 ······	7
第1節 調査区の設定 ······	7
第2節 基本層序 ······	8
第3節 検出遺構 ······	10
(1) 上層遺構 ······	10
(2) 下層遺構 ······	14
第Ⅳ章 出土遺物 ······	19
第1節 上層遺構出土遺物 ······	19
第2節 下層遺構出土遺物 ······	21
第Ⅴ章 総括 ······	22
報告書抄録	

挿図目次

図 1	藤原京右京十二条一坊位置図	1
図 2	発掘調査地周辺の遺跡 (S = 1 / 25,000)	3
図 3	発掘調査区と周辺の地形 (S = 1 / 2,500)	7
図 4	調査区土層断面図 (S = 1 / 80)	9
図 5	上層遺構平面図 (S = 1 / 80)	11
図 6	上層遺構断面図 (S = 1 / 40)	12
図 7	土坑 (05・15SK)・溝 (04SD) 平・断面図 (S = 1 / 40)	13
図 8	下層遺構平面図 (S = 1 / 80)	15
図 9	下層遺構断面図 (S = 1 / 40)	16
図 10	溝 (28・29SD)・土坑 (30SK) 平・断面図 (S = 1 / 40)	17
図 11	上層遺構出土遺物 (S = 1 / 4)	20
図 12	下層遺構出土遺物 (S = 1 / 4)	21

図 版 目 次

図版1（上）	上層遺構検出状況（西から）	23
図版1（下）	上層遺構完掘状況（西から）	23
図版2（上）	溝（14SD）完掘状況（北西から）	24
図版2（下）	溝（14SD）掘削痕残存状況（北東から）	24
図版3（上）	溝（14SD）土層断面（南東から）	25
図版3（下）	土坑（17SK）瓦出土状況（南から）	25
図版4（上）	下層遺構検出状況（西から）	26
図版4（下）	下層遺構完掘状況（西から）	26
図版5（上）	調査地から阿倍山田道方面を望む（北東から）	27
図版5（下）	調査区西半の整地土断面（南から）	27
図版6（上）	溝（18SD）完掘状況（北西から）	28
図版6（下）	溝（18SD）土層断面（南東から）	28
図版7	出土土器	29
図版8	出土瓦・割石	30

本 文

第Ⅰ章 位置と環境

第1節 地理的環境

藤原京跡は奈良県橿原市・桜井市・高市郡明日香村にまたがる遺跡であり、その多くは橿原市に含まれている。本調査地である藤原京右京十二条一坊は、藤原京の南端に位置し、東を朱雀大路、南を阿倍山田道と隣接する条坊であり、橿原市の南部に位置する。

橿原市は、奈良盆地の南端に位置する。市域の大部分は盆地内を北流する幾筋もの河川によって形成された沖積地からなり、市域の東側と南側には竜門山地から派生した丘陵のがびる。また、市内の中央部には畝傍山・耳成山の火山がある。橿原市東部を中心に造られた藤原京跡は、遺跡の大部分は沖積地に立地し、京城の南～南東部にかけては竜門山地から派生する丘陵を含む。

竜門山地から派生する丘陵は、現在は甘樺丘、雷丘やギヲ山、香具山などの明日香村から橿原市域にかけて直線的に並ぶ小丘陵や山塊、橿原市南部に位置する貝吹山や忌部山といった丘陵や山塊となっている。これらの地形は本来、南西から北西に軸を持つ1つの大きな山系であったものが、花崗岩類の風化と開析谷の発達により、現在のような、個々の山塊が連続する地形となったと考えられている。

調査地の一帯は、この竜門山系から派生した丘陵の北端の斜面に位置する。丘陵の縁辺には多くの小支谷があり、調査地は南北に延びる小支谷の東斜面上にあたる。したがって調査地は、全体としては南～西方向に傾斜する斜面上に立地しているといえる。

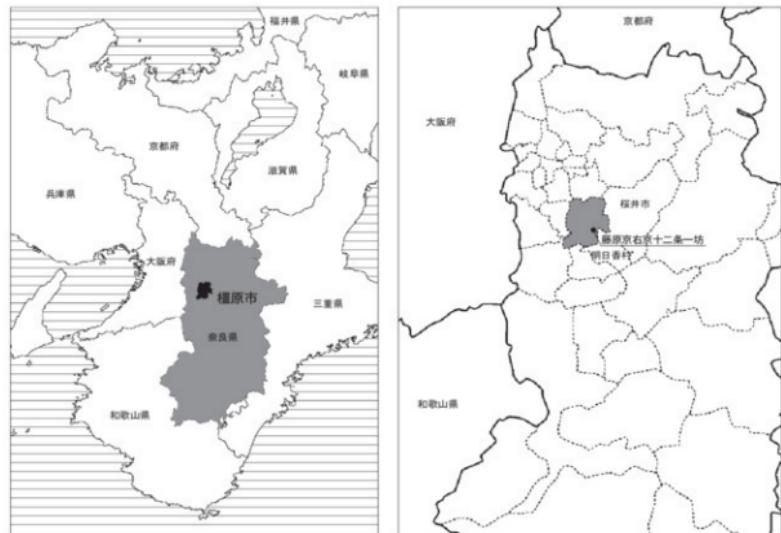


図1 藤原京右京十二条一坊位置図

第2節 歴史的環境

縄文時代以前の遺跡は、市内においては、忌部山遺跡において尖頭器の出土はあるものの、遺跡の存在は確認されていない。

縄文時代でも中期までは遺跡の検出例は少なく、遺跡が増加するのは後～晩期のことである。この時期には畠傍山の東麓に樅原遺跡が営まれる。樅原遺跡は、西日本を代表する当該期の集落遺跡で、桜川が形成した微高地に立地する。出土遺物には東北地方の影響が認められる樅原式土器や、土偶の他、海生動物の骨なども出土している。またこの時期には、市西部において曲川遺跡や新堂遺跡、市南西部に觀音寺本馬遺跡などの遺跡が曾我川流域に分布する。さらに、四条シナノ遺跡や黒田池遺跡など、縄文時代の遺物が出土する遺跡も点在する。

弥生時代には、河川に沿って遺跡が分布する。飛鳥川の流域には四分遺跡、高取川流域には四条シナノ遺跡、寺川流域には坪井・大福遺跡、曾我川流域には觀音寺本馬遺跡、一町遺跡、一町西遺跡、川西根成柿遺跡、曲川遺跡、中曾司遺跡などの集落遺跡がある。これらの遺跡には、四分遺跡や坪井・大福遺跡、一町遺跡や中曾司遺跡のように、それぞれの流域における拠点集落として弥生時代を通じて営まれるものがある一方で、川西根成柿遺跡や萩ノ本遺跡、四条シナノ遺跡のように、前期のみで廃絶する環濠集落も認められる。また後期には、忌部山遺跡や千塚山遺跡、上ノ山遺跡といった高地性集落が出現するが、その数は少ない。

古墳時代になると、それまで営まれた集落遺跡が廃絶し、新たな集落遺跡が出現する。四条遺跡や新堂遺跡では、前期の竪穴建物が検出されている他、五井遺跡では、旧河道の縁辺に配置された竪穴建物群や窓が検出されている。院上遺跡や北八木遺跡の北方などでも前期の遺物が出土している。また、本調査地の北側にあたる藤原京右京十二条一坊では、流路内から、北陸地方から搬入された装飾器台や、東海地方から搬入されたS字状口縁台付甕が出土している。なお前期の古墳には、スイセン塚古墳や新沢千塚500号墳などがあるが、その数は少ない。

古墳時代でも中期から後期になると、遺跡数が増加し、渡来系遺物が出土する遺跡が点在する。新堂遺跡や東坊城遺跡、四条大田中遺跡や北八木遺跡、丈六南遺跡では、陶質土器や輪式系土器が出土している。特に新堂遺跡や北八木遺跡、丈六南遺跡では、鍛冶関連の遺物も出土している点が注目される。本調査地の北側の平坦地でも、古墳時代中期後半になると、遺構や遺物の数が急増し、藤原京右京十二条一坊では、井戸が検出されている他、流路跡から大量の土器が出土している。集落遺跡の増加に伴い、古墳も中期以降は増加する傾向にある。平地部においては、曲川遺跡や南曾我遺跡、藤原宮跡下層の他、四条古墳群などで古墳群が確認されている。また、忌部山北側にはクノギ古墳、越智丘陵には鳥屋ミサンザイ古墳や沼山古墳がある。同じく越智丘陵にある新沢千塚古墳群は、後期に最盛期を迎える。奈良県最大の前方後円墳である丸山古墳の築造も後期である。

なお、中期から後期の古墳にも、渡来系の要素が認められる石室や遺物が確認される例がある。沼山古墳の石室構造や出土遺物は、朝鮮半島を出自とする渡来系の人々との関連を指摘されているものである。また、新沢千塚126号墳からは、シルクロードを経由してもたらされたと考えられているガラス皿やガラス碗が出土している。

飛鳥時代になると、高市郡明日香村を中心とする地域に宮殿が営まれ、その周辺には多くの関連遺

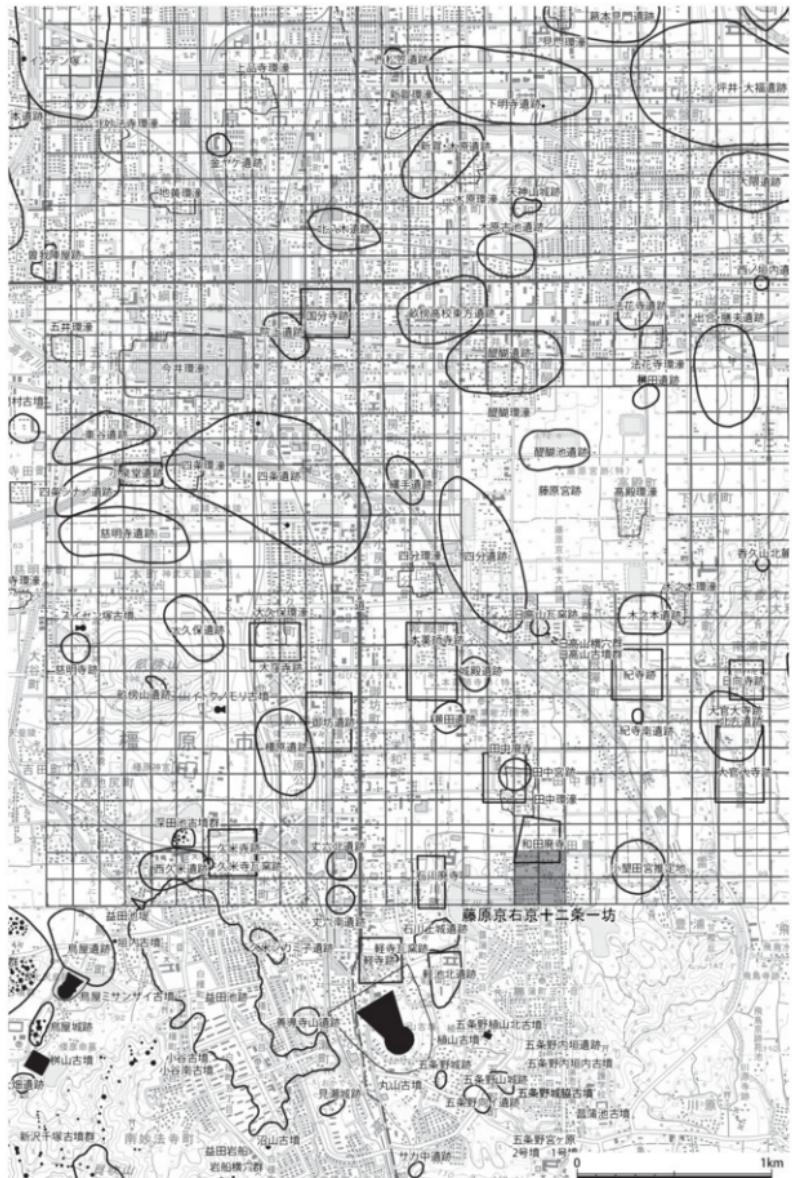


図2 発掘調査地周辺の遺跡 (S = 1/25,000)

跡が分布する。特に飛鳥に直接つながる道路、例えば阿倍山田道の周辺には、古宮遺跡や豊浦寺跡下層遺構（ともに明日香村）がある他、和田庵寺や石川庵寺といった寺院跡がある。さらに、天武5年（676）に藤原京の建設が開始されると、京内では先行条坊が施工される。先行条坊が施工された範囲は今のところ不明だが、藤原宮跡や本薬師寺跡では、先行条坊が設計の基準となっていたことが明らかにされている。本調査地周辺においては、藤原京右京十二条一坊において、西一坊坊間路の先行条坊が検出されている。この他、藤原京の造営にあたり大規模な造成がなされた痕跡も多く認められる。四条遺跡では、藤原京の造営の際に削平された古墳群（四条古墳群）が検出されているほか、藤原宮の南に位置する日高山では、藤原宮造営の際に掘り出された遺骸を改葬したとされる日高山横穴墓がある。

藤原京（694～710）は、持統天皇によって完成をみる。東西 5.3km、南北 4.9～5.3km と考えられる⁽¹⁾。藤原京内で発見される都城関連遺跡としては、藤原宮跡といった宮殿遺跡、大官大寺跡や本薬師寺跡、田中庵寺や和田庵寺などの寺院跡、京内外の宅地、条坊遺構など、多岐にわたる。

古墳は、いわゆる終末期古墳が造営される。市域における終末期古墳の分布は明日香村と隣接する市南東部の丘陵に集中し、ここに植山古墳や菖蒲池古墳、五条野宮ヶ原1・2号墳などの方墳が築造される。また、越智丘陵の東斜面にも小谷古墳などが築造される⁽²⁾。これらの古墳のうち植山古墳は、東西約40m、南北約30mの長方形墳で、大野丘に葬られた竹田皇子と推古天皇の墓との想定もされている。菖蒲池古墳は一辺約30mの二段築成の方墳で、1つの石室に2基の漆塗家形石棺が納められている。

平城京遷都（710）以降は、香具山の西北麓では香山正倉と考えられる遺構や遺物が出土しているものの、遺跡数が急激に減少する。奈良時代以降、大和平原に条里制が施工され、環濠集落が平地部に点在するようになる。本調査地周辺でも藤原京左京十二条二坊において、鎌倉時代の環濠と思われる遺構が検出されている。また、醍醐環濠、高殿環濠、四分環濠の3つの環濠集落も、本来の位置や形状は変化しているものの、中世以降に成立したと考えられている。

註

（1） 藤原京の範囲については、東西・南北ともに 5.3km とする「十条十二坊説」もあるが、発掘調査では、藤原京の南北長は確定していない。したがってここでは、発掘調査によって条坊道路が確認されている南北長も併記したため、上記の表現となった。

（2） 特に植山古墳や菖蒲池古墳、五条野宮ヶ原1・2号墳など方墳が集中して分布する地域については、一つの墓域としてまとめる考え方もある（竹田 2001、河上 2005）。この墓域は、菖蒲池古墳や五条野宮ヶ原1・2号墳が立地する斜面を南限として、東西南向に走る谷筋を北限として、南に天武・持統天皇陵や高松塚古墳、中尾山古墳などを含む墓域に接するものである。

参考文献（発掘調査報告書は削除する）

橿原市役所 1987『橿原市史』

中村太一 1996『藤原京と『圓孔』王城プラン』『日本歴史』582

竹田政敬 1997『藤原京十二条大路と山田道』『堅田直先生古希記念論文集』真陽社

竹田政敬 2001『五条野古墳群の形成とその被覆者についての憶説』『橿原考古学研究所紀要 考古学論叢』第24編

小澤 翠 2003『古代都市「藤原京」の成立』『日本古代宮都構造の研究』青木書店

河上邦彦 2005『大和の終末期古墳の編年と分布』『大和の終末期古墳』学生社

第Ⅱ章 調査の概要

第1節 発掘調査に至る経緯

調査の契機となったのは、本調査地における分譲宅地造成である。この開発計画をうけて平成24(2012)年3月7・8日に試掘調査を実施したところ、現在丘陵となっている地点では耕作土直下で地山である花崗岩バイラン土を検出したものの、遺構は全く検出されず、旧地形が大きく改変されていることが明らかであった。一方、開発地の西端では、厚い盛土の他、溝やピットを検出した。

この地点は、埋管工事を伴う道路部分にあたり、遺構面下まで掘削が計画されていた。そこで本市教育委員会と施主との間で遺跡保存に関する対応を協議し、遺跡への影響が避けられない範囲は、記録保存のために発掘調査を実施することになった。そして平成24(2012)年4月2日付で発掘調査及び整理作業に関する契約を締結した。

第2節 発掘調査の方法と経過

本調査では、重機を用いて表土から中世以降の旧耕土までを除去後、上層遺構面の調査を実施した。上層遺構の調査後は、地山上面まで、数度に分けて遺構検出を繰り返しながら人力で掘り下げた後、下層遺構の調査を実施した。

遺構の図化は、本調査区内に設定した基準点をもとに地区杭を設定し、実測作業を行った。なお地区杭の設定は、各遺構面毎に行った。

出土遺物の取り上げは、本来であれば同一遺構内でもグリッド毎に取り上げるべきである。しかしこの調査は調査面積が狭く、複数のグリッドにまたがる遺構も溝を除けば極めて少なかった。そこで、各遺構を単位として出土遺物の取り上げを行った。また同一遺構においては、層位的に出土遺物の取り上げを行った。本調査後は、調査区を埋め戻した上で、施主に返還した。

なお、本調査は、平成24(2012)年4月3日から同年5月11日までの実働19日で、この間に作業員のべ126人を要した。

また、現地における発掘調査が終了した後、平成24(2012)年5月14日から、同年7月27日まで整理作業を行った。整理作業の内容は、出土遺物の洗浄、注記や接合、復原の他、現地で撮影した図面や写真的整理、出土遺物の実測図の作成、実測図のトレース、各種台帳の作成である。この整理作業は実働43日、整理員のべ50.5人を要した。

以下に調査日誌抄を掲げる。

4. 3 (火) 雨天のため、現地作業中止。
4. 4 (水) 調査開始。重機により表土除去。
4. 5 (木) 重機撤去完了。壁面精査及び壁面上土層の分層。土層觀察の限り、東側の丘陵から盛土を行っていると考えられる。道構検出を行うも、検出道構は少ない。排土の整理。
4. 6 (金) 上層道構検出写真撮影のための清掃。上層道構検出写真撮影。基準点測量。
4. 9 (月) 上層道構の調査。平面図作成。調査区東端において、丘陵地形の縁辺を検出、盛土も薄いようである。検出道構の多くは中世と考えられる。
4. 10 (火) 上層道構の調査（ほぼ完了）。溝（14SD）は2度以上の掘り直しがあり、最下層からも瓦器が出土した。平面図作成（ほぼ完了）。上層道構の多くは中世の道構である可能性がある。ピットで相互に関連性を持つものはない。
4. 11 (水) 雨天のため、現地調査中止。
4. 12 (木) 上層道構完掘。完掘写真撮影のための清掃。平面図及び上層図作成。
4. 13 (金) 上層道構完掘写真撮影。平面図及び上層図補足。下層道構調査前の整地土断ち削り調査開始。
4. 16 (月) 下層道構の調査（整地土断ち削り完了）。地山直上でピットや溝（18SD）を検出。下層整地土は層毎に掘り下げているが、道構面はないようである。
4. 17 (火) 下層整地土の調査。整地土は大きく4層に分層が可能。現在上から3層目まで調査中。全ての面において層毎に精査するも道構面はないようである。下層道構面は地山直上有る模様。
4. 18 (水) 下層整地土の調査。地山直上で道構検出。斜面上に多くの道構がある。なお整地土のうち、上から3層目の整地面にも道構面があつた可能性が高いが、各層の上面での精査時には道構は確認できていない。下層道構検出写真の準備。排土の整理。
4. 19 (木) 下層道構検出写真撮影。平面図及び上層図作成。下層道構の溝（18SD）の調査を行うも、出土遺物は殆どない。
4. 20 (金) 雨天のため、現地調査中止。
4. 23 (月) 下層道構の調査。溝（18SD）完掘。その他の道構も出土遺物は殆どなく、時期の決定が困難である。
4. 24 (火) 下層道構の調査。溝（18SD）壁面写真撮影。調査区平面図、上層図、道構断面図作成。
4. 25 (水) 各種実測図作成（完了）。下層道構の調査（終了）。調査地周辺の清掃。
4. 26 (木) 雨天のため、現地調査中止。
4. 27 (金) 発掘調査工程より、現地調査中止。
5. 1 (火) 天候不良のため、現地作業中止。
5. 2 (水) 雨天のため、現地調査中止。
5. 7 (月) 完掘写真撮影のための清掃。
5. 8 (火) 完掘写真撮影。
5. 9 (水) 調査区埋め戻し（重機）。調査機材の整理。
5. 10 (木) 調査区埋め戻し（完了）。調査地及び調査地周辺の周辺清掃。調査機材の整理。
5. 11 (金) 機材搬収。トイレ搬出。現地調査終了。

第Ⅲ章 発掘調査の成果

第1節 調査区の設定

本調査では、遺跡への影響がある道路部分の全域を調査区とした。そのため本調査区の主軸は、地形の傾斜の主軸とは直交していない。

また、本調査区の位置の測量については、本調査が必要な範囲の位置明示を施主に依頼した。そしてこの測量をもとに本調査区を設定した。

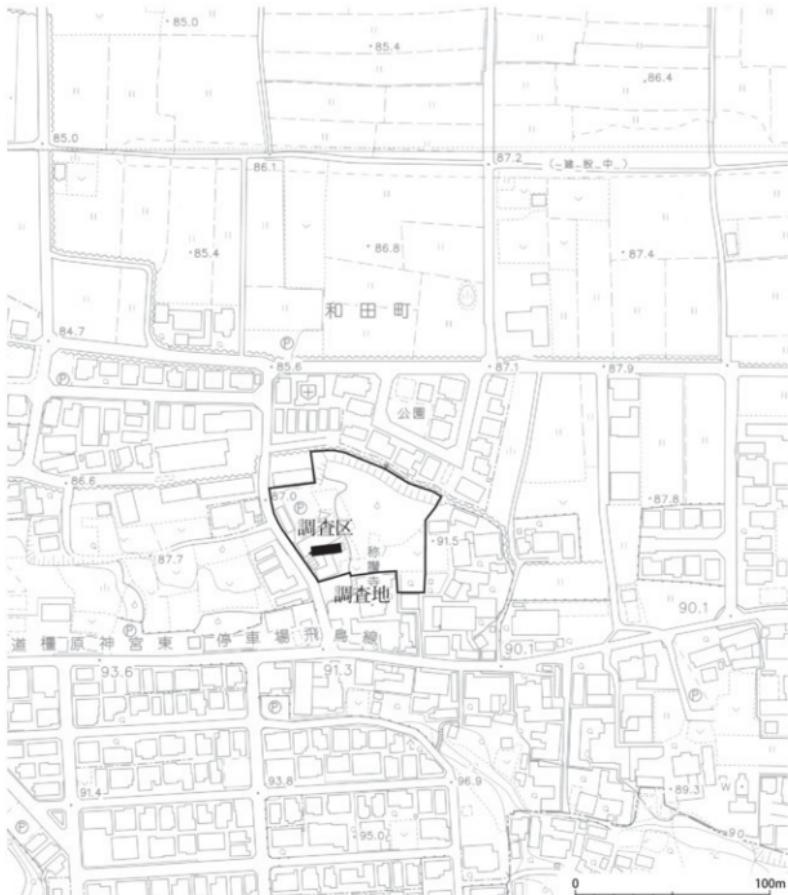


図3 発掘調査区と周辺の地形 (S = 1/2,500)

第2節 基本層序

本調査区の基本層序（図4）は、堆積時期と性格から以下の5層にまとめることができる。

I層 現代盛土（宅地造成による）

II層 盛土（中世以降）

III層 盛土（中世）

IV層 盛土（古墳時代～飛鳥時代。上面が上層遺構検出面）

V層 地山（上面が下層遺構検出面）

以下、本調査区の層序を説明する。

I層は、本調査地を宅地化する際に行った現代の盛土である。出土遺物はない。上面の標高は88.9～89.4mである。

II層は、褐色砂質土及び灰褐色砂質土を主体とする。下面是東から西にむけて段々に下がっていることから、段々になっていた地形に盛土し、平坦地に造成したと考えられる。中世の遺構である溝（14SD）を破壊していることから、中世以降の盛土と考えられる。上面の標高は調査区東端で89.1m、調査区西端で88.3mである。

III層は、褐色砂質土を主体とする。それぞれの層の厚さは約0.3mである。土質は山土を含み、硬くしまるのが特徴である。上面は削平を受けているものの、調査区東半ではほぼ水平である。溝（14SD）の掘り込み面である。IV層上面が上層遺構面（中世）であることから、中世の盛土と考えられる。上面の標高は調査区東端で88.9m、西端で87.5mである。

IV層は、にぶい黄褐色砂質土及び褐色砂質土を主体とする。土質からIV層はIV-1層（51～54層）IV-2層（55～60層）、IV-3層（61層）、IV-4層（62～68層）の4層にまとめることができる。IV層上面は上層遺構面である。出土遺物には土師器・須恵器があり、瓦器は含まれない。それぞれの土層の共通性や出土遺物から、古墳時代から飛鳥時代の盛土と考えられる。主に調査区の西半に分布する。上面の標高は調査区中央で88.2m、西端で87.4mである。

V層は、山土及びバイラン土からなる。地山である。一部を遺構により削平されているものの、東から西に低くなる。無遺物である。上面の標高は調査区東端で89.1m、西端で86.4mで、本調査区の地形がもとは東から西へ下がる地形であったことは明らかである。

なお、本調査区の東側に広がる丘陵は大きく削平を受けており、耕作土の直下でV層を検出したのみである。

以上より、本調査区における地形の成り立ちと変遷を検討する。本調査区は丘陵の端部に位置すると考えられる。特にV層上面の形状に注目すると、本調査区東端では、削平を受けているにも関わらず、Y = -17,775.00付近を境に東と西では、傾斜が異なることが分かる。つまり、Y = -17,750.00の西側は緩やかに東から西へ下る地形となる。本調査区における古墳時代以降の盛土による造成は、Y = -17,750.00ラインより西側の、傾斜が緩やかな地形に対して行われたと考えられる。

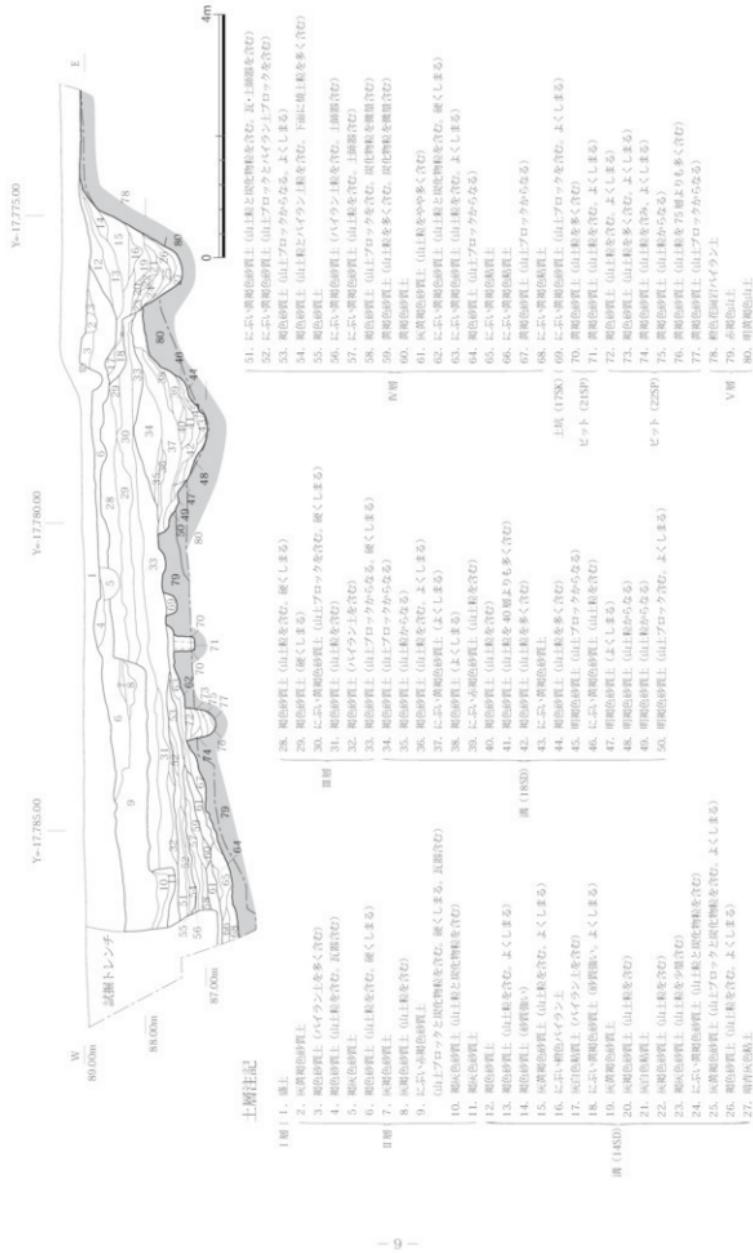


図4 測定区土壤断面図 (S = 1/80)

第3節 検出遺構

古墳時代から飛鳥時代の盛土であるIV層上面及び地山であるV層上面で遺構検出を行った。検出遺構の多くは、この2面が掘り込み面となっている。

上層遺構にはピット・土坑・溝があり、下層遺構にはピット・土坑・溝がある。

(1) 上層遺構

ピット（01～03・06～13・16SP）・土坑（05・17・20SK）・溝（04・14SD）がある。

ピット（01SP） 平面形は一辺0.3mの隅丸方形を呈し、深さ0.1mを残す。埋土は単層である。出土遺物はなく、遺構間の新旧関係もないため、時期は不明である。

ピット（02SP） 平面形は一辺0.8mの隅丸方形を呈し、深さ0.1mを残す。掘方の底面に長軸0.2m、短軸0.1m、深さ0.1m未満の楕円形の凹みがある。土層断面にも柱抜き取り穴と考えられる土層（1層）があることから、柱穴と考えられる。出土遺物に土師器・瓦器があるが、いずれも細片で時期を特定できない。

ピット（03SP） 平面形は一辺0.3mの隅丸方形を呈し、深さ0.1mを残す。埋土は単層である。出土遺物に土師器があるが、細片で時期を特定できない。遺構間の新旧関係もなく、時期は不明である。

ピット（06SP） 平面形は長軸0.4m、短軸0.2mの楕円形を呈し、深さ0.1mを残す。埋土は単層である。出土遺物に土師器皿（図11-2）がある。出土遺物から、13世紀代の遺構と考えられる。

ピット（07SP） 平面形は直径0.4mの不整円形を呈し、深さ0.2mを残す。土層は2層に分層でき、上層は人為的な埋土である。出土遺物はない。遺構の新旧関係から、ピット（08SP）よりも古い遺構である。

ピット（08SP） 平面形は直径0.5mの不整円形を呈し、深さ0.3mを残す。埋土は4層に分層でき、いずれの層にも山土が含まれる。出土遺物に須恵器があるが、細片で時期を特定できない。遺構の新旧関係から、ピット（07SP）よりも新しい遺構である。

ピット（09SP） 平面形は長軸0.7m、短軸0.3mの不整形を呈し、深さ0.1mを残す。底面に焼土層があるが、焼土層からの遺物の出土はない。出土遺物に土師器があるが、細片で時期を特定できない。遺構の新旧関係から、溝（14SD）よりも古い遺構である。

ピット（10SP） 平面形は一辺0.2mの隅丸方形で、深さ0.2mを残す。埋土は単層である。出土遺物に瓦器があるが、細片で器形や時期を特定できない。遺構の新旧関係から、溝（14SD）よりも新しい遺構である。

ピット（11SP） 平面形は長軸0.3m、短軸0.2mの不整形で、0.3mを残す。埋土は単層である。出土遺物に土師器・須恵器・瓦器があるが、いずれも細片で時期を特定できない。遺構の新旧関係から、溝（14SD）よりも新しい遺構である。

ピット（12SP） 平面形は一辺0.2mの隅丸方形で、深さ0.3mを残す。埋土は単層である。出土遺物はない。遺構の新旧関係から、溝（14SD）よりも新しい遺構である。

ピット（13SP） 平面形は一辺0.3mの隅丸方形で、深さ0.3mを残す。埋土は単層である。出土

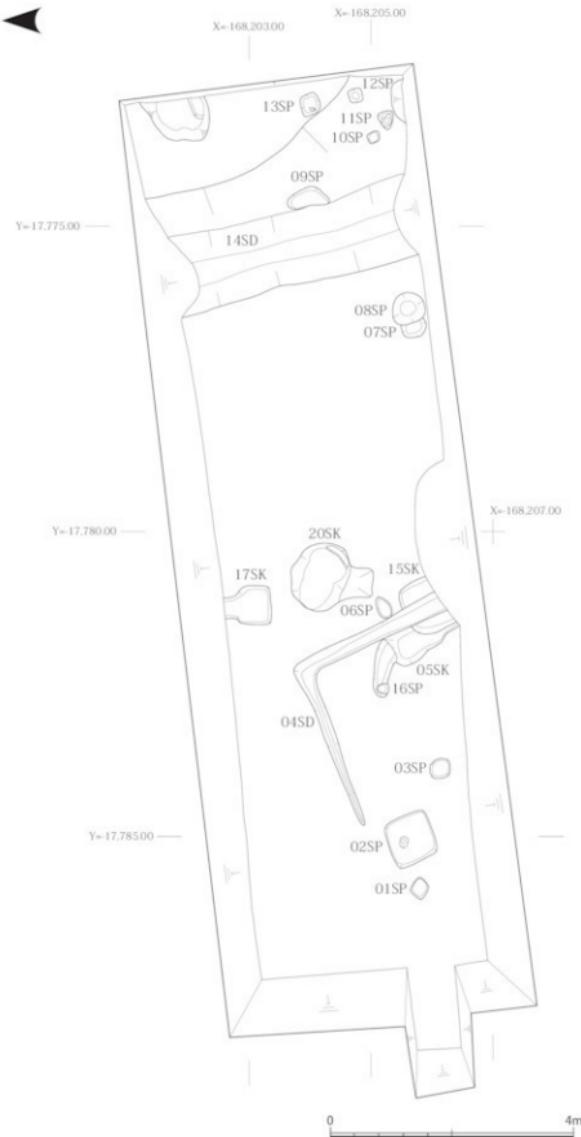
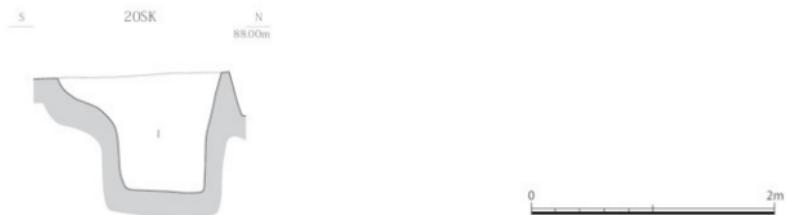
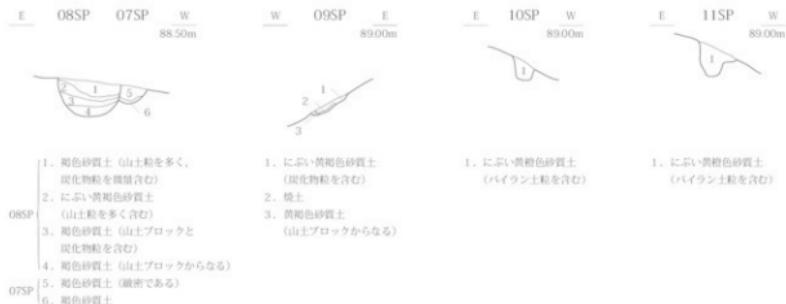


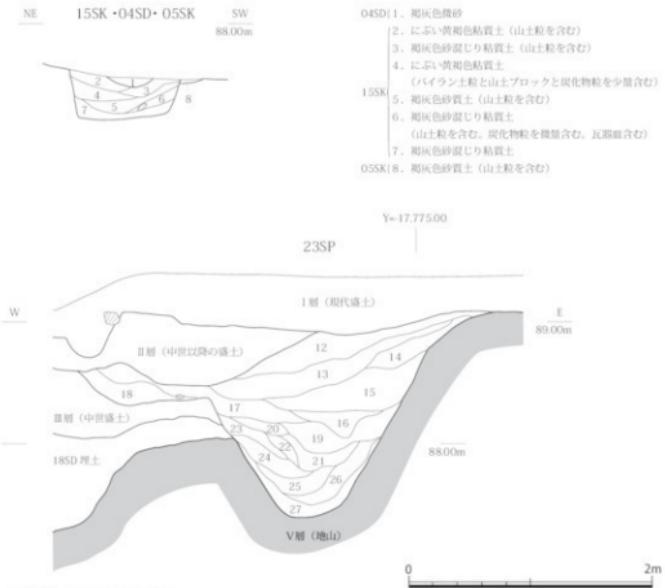
図5 上層遺構平面図 (S = 1/80)



1. 剛色砂質土 (山土粒をやや多く、
炭化物粒を微量含む。硬くしまる)

トーンは地山 (V層) を表す。

図 6 上層遺構断面図 (S = 1/40)



土層注記（土層番号は図4と対応）

- | | |
|---------------------------|----------------------------|
| 12. 開色砂質土 | 21. 黒褐色粘質土 |
| 13. 開色砂質土（山土粒を含む。よくしまる） | 22. 黒褐色砂質土（山土粒を含む） |
| 14. 開色砂質土（砂質強い） | 23. 黒褐色砂質土（山土粒を少量含む） |
| 15. 黒黄褐色砂質土（山土粒を含む。よくしまる） | 24. にふい開闊色砂質土（山土粒と炭化物粒を含む） |
| 16. にふい褐色バイアン土 | 25. 黑褐色砂質土 |
| 17. 黒白色粘質土（バイアン土を含む） | （山土粒と炭化物粒を含む。よくしまる） |
| 18. にふい開闊色砂質土（砂質強い、よくしまる） | 26. 開色砂質土（山土粒を含む。よくしまる） |
| 19. 黒黃褐色砂質土 | 27. 墓青灰粘土 |
| 20. 黑褐色砂質土（山土粒を含む） | |

図7 土坑（05・15SK）・溝（04SD）平・断面図（S = 1/40）

遺物に土師器・須恵器・瓦器があるが、いずれも細片で時期を特定できない。

ピット（16SP） 平面形は直径0.2mの不整円形で、深さ0.1mを残す。埋土は単層である。出土遺物はない。遺構の新旧関係から、土坑（05SK）よりも古い遺構である。

土坑（05SK） 平面形は東西1.2m、南北1.3m以上を残す不整形で、隅丸長方形の土坑の北辺に溝が取り付く形状である。深さ0.1mを残す。埋土は単層である。出土遺物には土師器・瓦器があり、土師器皿（図11-1・3）や瓦器椀（図11-15）が含まれる。出土遺物から、12世紀後半の遺構と考えられる。遺構の新旧関係から、土坑（15SK）・溝（04SD）よりも古い遺構である。

土坑（15SK） 平面形は東西1.0m、南北0.7m以上の隅丸方形と考えられ、深さ0.4mを残す。埋土は粘質土が中心で、山土粒を含む層が多い。出土遺物に土師器・須恵器・瓦器があり、瓦器には完形品を含む皿（図11-8・9）や椀（図11-10・11・16）がある。出土遺物から、12世紀後半の遺構と考えられる。遺構の新旧関係から、土坑（05SK）よりも新しく、溝（04SD）よりも古い遺構である。

土坑（17SK） 平面形は東西0.6m、南北0.8m以上の不整形で、深さ0.1mを残す。埋土は単層である。出土遺物には平瓦（図11-19・20）がある。出土遺物から、飛鳥時代以降の遺構と考えられる。

土坑（20SK） 平面形は東西1.1m、南北1.4mの不整円形で、深さ1.0mを残す。埋土は単層で、人為的な埋め戻し土である。出土遺物には土師器があるが、細片のため時期を特定できない。

溝（04SD） 平面形は「く」の字形で、南南東から北北西に向かって直線的にのび、西方向にはほぼ直角に屈曲して西南西に直線的にのびる。規模は全長5.2m以上で、幅0.4m、深さ0.1mを残す。埋土は単層で、土質は上層遺構面で検出した土坑やピットと類似する。流水の痕跡を示すラミナも認められないことから、耕作溝である可能性が高い。出土遺物はない。遺構の新旧関係から、土坑（05・15SK）よりも新しい遺構である。

溝（14SD） 南南東から北北西に直線的にのびる。規模は全長4.6m以上で、幅3.1m、深さ1.5mを残す。埋土は最下層の27層が自然堆積土である以外は全て人為的な埋土で、埋土の堆積状況から、溝（14SD）は埋没過程で、3回の掘り直し（12～16層・17～22層・23～26層）がある。溝の壁面には、溝掘削時の工具痕が残存する。出土遺物には土師器・須恵器・瓦器があり、土師器には皿（図11-4～7）・环A（図11-18）がある。須恵器には环G蓋（図11-17）が、瓦器には椀（図11-14）がある。このうち土師器皿（図11-5・6）は、最下層の27層からの出土である。なお、土師器环A（図11-18）と須恵器环G蓋（図11-17）は混入品である。出土遺物から、13世紀後半の遺構と考えられる。遺構の新旧関係から、ピット（09SP）よりも新しく、ピット（10～12SP）よりも古い遺構である。

以上、上層遺構は本調査区全面で検出したものの、遺構間の関連性は明瞭でない。その中で斜面の裾に掘削された溝（14SD）は本調査地一帯における土地利用を考える上で重要な遺構である。

（2） 下層遺構

ピット（21～27・32・33SP）・溝（18・28・29SD）・土坑（30SK）がある。遺構は地山（V層）上面で検出したが、溝（28・29SD）及び土坑（30SK）は藤原京期以前の盛土（IV層）中に掘り込み面を持つ。

ピット（21SP） 平面形は一辺0.3mの隅丸方形を呈し、深さ0.4mを残す。直径0.1mの柱痕跡があるため、柱穴と考えられる。出土遺物がなく、遺構間の新旧関係もない。地山であるV層上面が掘り込み面であるため、本調査地における盛土の開始時期よりも古い遺構と考えられる。

ピット（22SP） 平面形は東西0.5m、南北0.2m以上の隅丸方形と考えられ、深さ0.5mを残す。埋土は褐色もしくは黄褐色砂質土を主体とし、山土粒を含む点でピット（21SP）と共に通する。出土遺物はない。ピット（21SP）と同様、V層上面が掘り込み面であるため、本調査地における盛土の開始時期よりも古い遺構と考えられる。

ピット（23SP） 平面形は直径0.2mの円形で、深さ0.2mを残す。埋土は単層である。出土遺物はない。遺構の新旧関係もないため、遺構の時期は不明である。

ピット（24SP） 平面形は長辺0.2m、短辺0.1mの隅丸方形を呈し、深さ0.1mを残す。埋土は単層である。出土遺物はない。遺構の新旧関係もないため、遺構の時期は不明である。

ピット（25SP） 平面形は長軸0.3m、短軸0.2mの不整円形を呈し、深さ0.1mを残す。埋土は単

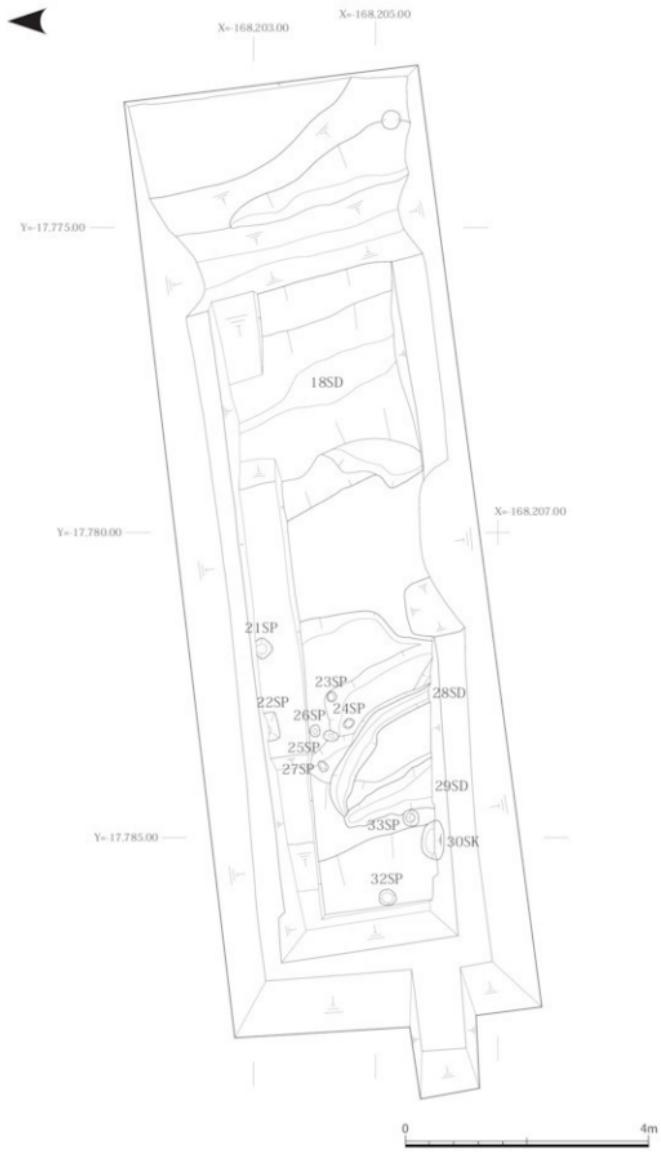
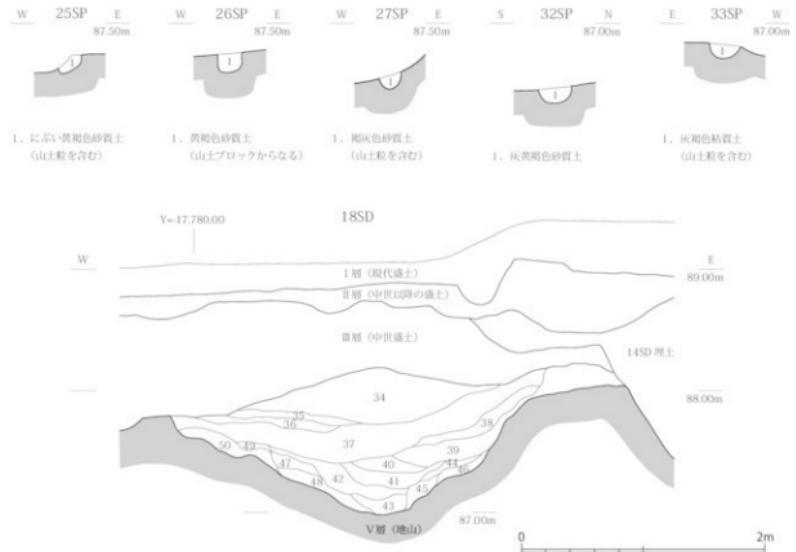


図8 下層遺構平面図 (S = 1/80)



土層注記 (土層番号は図4と対応)

- | | |
|------------------------------|--------------------------------|
| 34. 褐色砂質土
(山土ブロックからなる) | 43. に赤い黄褐色砂質土 |
| 35. 褐色砂質土
(山土粒からなる) | 44. 褐色砂質土
(山土粒を多く含む) |
| 36. 褐色砂質土
(山土粒を含む、よくしまる) | 45. 明褐色砂質土
(山土ブロックからなる) |
| 37. に赤い黄褐色砂質土
(よくしまる) | 46. に赤い黄褐色砂質土
(山土粒を含む) |
| 38. 褐色砂質土
(よくしまる) | 47. 明褐色砂質土
(よくしまる) |
| 39. に赤い黄褐色砂質土
(山土粒を含む) | 48. 明褐色砂質土
(山土粒からなる) |
| 40. 褐色砂質土
(山土粒を含む) | 49. 明褐色砂質土
(山土粒からなる) |
| 41. 褐色砂質土
(山土粒を4割よりも多く含む) | 50. 明褐色砂質土
(山土ブロック含む、よくしまる) |
| 42. 褐色砂質土
(山土粒を多く含む) | |

図9 下層遺構断面図 (S = 1/40)

層で、出土遺物はない。遺構の新旧関係もないため、遺構の時期は不明である。

ピット(26SP) 平面形は直径0.2mの不整円形を呈し、深さ0.2mを残す。埋土は単層で、出土遺物はない。遺構の新旧関係もないため、遺構の時期は不明である。

ピット(27SP) 平面形は長軸0.2m、短軸0.1mの不整円形を呈し、深さ0.1mを残す。埋土は単

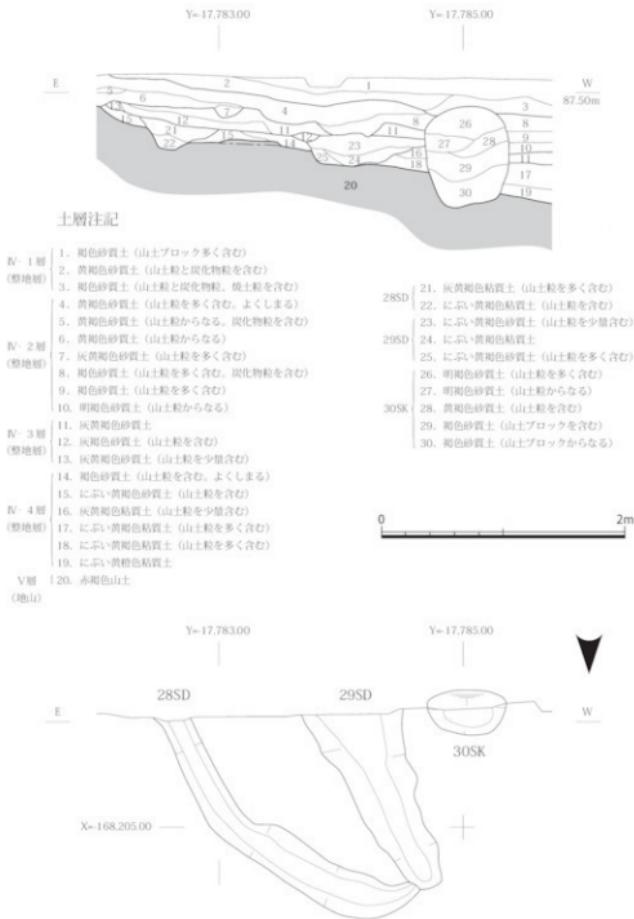


図 10 溝 (28・29SD)・土坑 (30SK) 平・断面図 (S = 1/40)

層で、出土遺物はない。遺構の新旧関係もないため、遺構の時期は不明である。

ピット (32SP) 平面形は直径 0.2m の不整円形を呈し、深さ 0.1m を残す。埋土は単層で、出土遺物はない。遺構の新旧関係もないため、遺構の時期は不明である。

ピット (33SP) 平面形は直径 0.3m の不整円形を呈し、深さ 0.1m を残す。埋土は単層で、出土遺物はない。遺構の新旧関係もないため、遺構の時期は不明である。

溝 (18SD) 南南東から北北西に直線的にのびる。全長 3.3m 以上で、幅 3.7m、深さ 1.2m を残す。断面形は緩やかな V 字状である。埋土は 34 ~ 38 層、39 ~ 44 層、45 ~ 47・48 層、46 ~ 49・50 層の 4 層にまとめることができ、埋没の過程で 3 度の掘り直しが想定できる。出土遺物に土師器・須

恵器がある。土師器はいずれも細片である。須恵器には壺（図 12-24）と甕（図 12-25）がある。遺構の新旧関係はない。出土遺物から藤原京期の遺構と考えられる。

溝（28SD） 南東から北西に弧を描く。全長 2.5m 以上で、幅 0.6m、深さ 0.3m を残す。断面形は逆台形である。埋土は人為的な埋め土で、2 層に分かれ。出土遺物はない。IV - 4 層上面が遺構掘り込み面である。遺構の新旧関係から、溝（29SD）よりも古い遺構である。

溝（29SD） 南南東から北北西に直線的にのびる。全長 1.5m 以上で、幅 1.0m、深さ 0.3m を残す。断面形は逆台形である。埋土は人為的な埋め土で、3 層に分かれ。出土遺物は环蓋（図 12-21）がある。IV - 4 層上面が遺構掘り込み面である。出土遺物から古墳時代中期後半の遺構である。遺構の新旧関係から、溝（28SD）よりも新しい遺構である。

土坑（30SK） 調査区内では遺構の一部を検出した。平面形は長軸 0.7m、短軸 0.4m の楕円形と考えられる。埋土は明褐色砂質土及び褐色砂質土を主体とする。出土遺物はない。遺構の新旧関係はないが、藤原京期以前の盛土である IV - 1 層もしくは IV - 2 層上面が遺構掘り込み面である可能性が高いことから、飛鳥時代の遺構と考えられる。

なお、上層遺構と下層遺構の間の盛土（IV 層）は第Ⅲ章第2節でも述べた通り、大きく 4 層にまとめることができる。盛土中からは、土師器や須恵器、割石が出土している。個別の層からの出土遺物としては、IV - 1 層から須恵器蓋（図 12-22）、IV - 2 層から割石（図 12-26）、IV - 3 層から須恵器環 G（図 12-23）が出土している。出土遺物や遺構の新旧関係から、古墳時代中期後半から飛鳥時代の盛土と考えられるが、盛土を行った時期は藤原京期が中心と考えられる。

以上、下層遺構は少ないものの、地形との関連性が想定される溝（18SD）や、盛土の上限を示唆する可能性のある溝（28・29SD）など、本調査地における開発を考えるうえで重要な遺構がある。

第IV章 出土遺物

遺物の総出土数はコンテナ3箱である。出土遺物の大半は細片であるために、器形や時期の特定が困難で、図化できたのは、少數の遺物にとどまる。また本調査においては、それぞれの遺構面の年代観の把握が重要と考えられる。そこで記述は、調査面毎にまとめた。

第1節 上層遺構出土遺物

土師器・須恵器・瓦器・瓦がある（図11）。また、遺構外からは瓦器（12・13）が出土している。

土師器（1～7・18）は、皿と壺がある。

皿（1～7）は、口径8.0～9.1cm、器高1.0～1.5cmの小型品（1～5）と、口径11.1～12.9cm、器高1.9～2.3cmの中型品（6・7）がある。

（1・2）は、中央部が盛り上がる底部から内縁気味に立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。（3）は、平底の底部からやや内縁気味に立ち上がる。口縁端部はわずかにつまみあげる。（4・5）は、丸みを帯びた底部から屈曲して、直線的に立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。（6・7）は、平底の底部から屈曲して、外反気味に開く。口縁端部はつまみあげる。器面調整は内外面の全面を横ナデするもの（3）と、内面及び口縁部外面を横ナデし、底部外面は無調整のもの（1・4・5・7）がある。（2・6）は、器壁が荒れて調整不明である。

壺A I（18）は、やや丸みを帯びた底部からやや外反気味に立ち上がる。口縁端部は肥厚させる。器面調整は、器壁が荒れて不明である。口径は19.9cm、器高は4.6cmを測る。

瓦器（8～17）は、皿と椀がある。

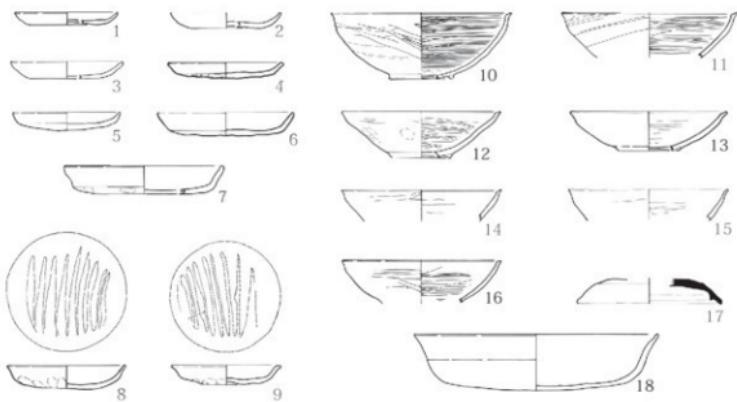
皿（8・9）は、平底に近い底部から緩やかに立ち上がり、外反気味に開く口縁部に至る。口縁部と底部との境は稜を持つ。口縁端部は薄く、尖り気味のもの（8）と、厚く、面を持つもの（9）がある。器面調整は共通し、内面の全面及び口縁部外面は横ナデし、底部外面は無調整で指頭痕が残る。また、内面にはジグザグ状の暗文を施す。口径は（8）が9.5cm、（9）が8.6cmで、器高は（8）が2.0cm、（9）が1.7cmを測る。

椀（10）は、丸みを帯びた体部から稜を持ち、外反気味の口縁部に至る。口縁端部の沈線はなだらかである。高台は短く、外反し、端部に面を持つ。器面調整は、内面は体部を圓線ミガキ、見込みに螺旋状暗文を施す。外面は粗い横ミガキである。口径14.5cm、器高5.4cmを測る。

椀（11～16）は、扁平な体部から稜を持ち、口縁端部に至る。口縁端部の沈線はなだらかである。高台は低く、断面が三角形である（12・13）。器面調整は、いずれも体部内面を圓線ミガキし、体部外面を粗い横ミガキする点で共通する。体部内面の圓線ミガキは、密なもの（11・16）と粗いもの（12～15）がある。なお、底部内面の暗文については螺旋状暗文を施す（12・13）。口径は12.7cm～14.2cm、器高は（12）が3.8cm、（13）が3.2cmを測る。

須恵器（17）は、蓋がある。

蓋（17）は、壺Gに伴うもので、つまみを欠失する。かえりは端部よりも高い位置にある。器面調整は内外面ともロクロナデである。口径は11.6cm、残高は2.0cmを測る。



出土遺構
19 06SP: 2
05SK: 1・3・15
15SK: 8 ~ 11・16
17SK: 19・20
14SD: 4 ~ 7・14・17・18
遺構検出面: 12・13

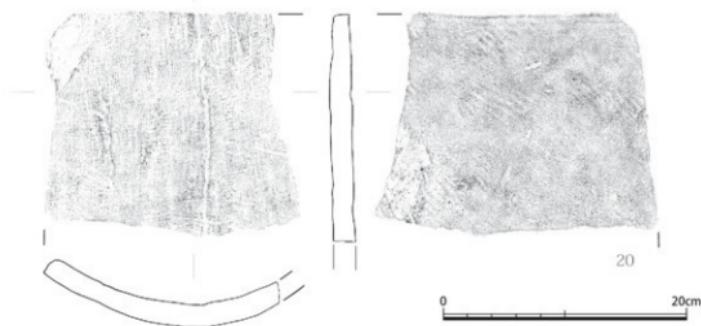


図 11 上層遺構出土遺物 (S = 1/4)

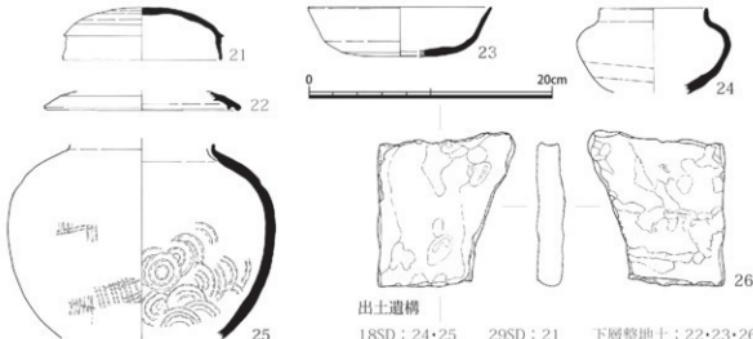


図 12 下層遺構出土遺物 (S = 1/4)

瓦 (19・20) は、土師質の平瓦である。

(19) は、一部のみの残存である。厚さは 2.6 cm、残存幅は 14.5 cm、残存長は 23.0 cm である。両面とも摩耗が激しく、調整不明である。

(20) は、粘土板桶巻作りである。四面から見て上面と左側面の一部が残存する。側面は断面「コ」字形で、粘土板を切り離した後の面取りはない。瓦の表面には凸面に平行叩き、凹面に布目痕と布の縫じ合わせ痕の他、分割界線が残る。厚さは 1.8 cm、残存幅は 21.8 cm、残存長は 18.7 cm を測る。

第 2 節 下層遺構出土遺物

土師器・須恵器・熔結凝灰岩の割石がある (図 12)。

須恵器 (21～25) は壺蓋・蓋・壺・甕がある。

壺蓋 (21) は完形である。やや丸みを帯びた頂部から、短く張り出した受部に至る。口縁部はやや開き気味で、口縁端部は丸くおさめる。器面調整は、頂部をロクロ削りする以外は内外面ともロクロナデである。また頂部内面には 1 方向の指ナデをする。口径 12.8 cm、器高 4.8 cm を測る。

蓋 (22) は、壺 B に伴うもので、頂部を欠失する。端部は丸みを帯び、かえりは端部よりも高い位置にある。器面調整は内外面ともロクロナデである。口径は 15.6 cm、残高は 1.5 cm を測る。

壺 G (23) は、丸みを帯びた平底の底部から稜を持ち、外反氣味の口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。器面調整は底部外面が回転ヘラ切り、その他は内外面ともロクロナデである。口径は 14.9 cm、器高は 4.0 cm を測る。

壺 (24) は小型品で、肩の張った胴部から、屈曲して短く立ち上がる口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。器面調整は内外面ともロクロナデである。口径は 8.6 cm、残高は 7.0 cm を測る。

甕 (25) は、胴部のみ残存する。胴部は肩が張り、丸みを帯びる。器面調整は外面を平行叩きし、内面には青海波文の当て具痕が残る。胴最大径は 21.8 cm、残高は 15.9 cm を測る。

熔結凝灰岩 (26) は、割石がある。

(26) は、いわゆる棗原石である。方形と考えられるが、2 辺の一部を残すのみである。表裏・側面とも石材を割った後の加工は見られない。厚さは 2.2 cm を測り、縦 12.0 cm、横 11.0 cm を残す。

第V章 総括

本調査では、2面の遺構面を確認し、中世及び古墳時代から藤原京期にかけての遺構を検出した。検出遺構は少なかったものの、いずれの遺構面も地形との関わりを考える上で重要である。そこで本調査の総括として、本調査地における遺構変遷と地形の関係をまとめる。

遺構変遷

本調査地において遺構が確認されるのは、古墳時代中期後半である。この時期には、まだ斜面地の盛土造成は行われていないようだ。主要な遺構は溝（28・29SD）程度である。その後、藤原京の造営に伴い、本調査地においては、斜面地の盛土造成が行われる。しかし、藤原京期と判断できる遺構は、溝（18SD）や土坑（30SK）に限られる。藤原京期以降も盛土による平坦地の造成は続き、平安時代末期及び鎌倉時代には溝（04・14SD）や土坑（05・15・20SK）といった遺構が確認される。

このように本調査地においては、土地利用は古墳時代中期末に始まり、藤原京期及び平安時代末期及び鎌倉時代にピークを迎えたと考えられる。

地形と遺構の分布

本調査地における土地利用を明らかにするうえで最も重要な遺構は、溝（14・18SD）である。この2条の溝は共に、丘陵の先端部に掘削され、何度も掘り直されている。これらから溝（14・18SD）は、丘陵から流れ落ちる雨水の排水溝としての役割を担っていたと考えられる。

しかし、長期にわたり盛土を繰り返し造成された平坦面の利用方法については、今のところ、不明と言わざるを得ない。また藤原京期には、本調査地の南に阿倍山田道が通っているが、溝（18SD）や整地と阿倍山田道との関係も不明である。とはいっても、阿倍山田道が飛鳥時代において重要な道路であった事を考慮すれば、阿倍山田道に隣接する斜面地である本調査地の造成は、阿倍山田道沿いの谷地形を盛土によって埋め、平坦面を少しでも多く造り出すという意味においては、非常に重要な調査成果といえる。

また、溝の掘り直しが繰り返し行われている点は、溝の西側における土地利用に大きな変化がなかった事を示すのではないだろうか。鎌倉時代においても藤原京期の溝（18SD）とほぼ同じ場所に溝（14SD）を掘削している点はこれを補強するといえる。

一方、本調査の課題として、古墳時代及び藤原京期における本調査地の西側に広がる谷地形の利用方法の解明が挙げられる。古墳時代には、本調査地の南に広がる平坦地において古墳時代中期に集落の存在が予想される。藤原京期には、本調査地の北側に和田庵寺の寺域が想定され、本調査地の一帯は、阿倍山田道と和田庵寺の間を繋ぐ地点となる。

本調査における課題は、これらの点を視野に入れつつ、今後の調査成果を踏まえながら解明すべき課題といえよう。



上層遺構検出状況（西から）



上層遺構完掘状況（西から）



溝（14SD）完掘状況（北西から）



溝（14SD）掘削痕残存状況（北東から）



溝（14SD）土層断面（南東から）



土坑（17SK）瓦出土状況（南から）



下層造構検出状況（西から）



下層造構完振状況（西から）



調査地から阿倍山田道方面を望む（北東から）



調査区西半の整地土断面（南から）



溝（18SD）完掘状況（北西から）



溝（18SD）土層断面（南東から）





報 告 書 抄 錄

橿原市埋蔵文化財調査報告 第8冊

藤原京跡 IV

—右京十二条一坊の調査—

発行年月日 平成 25（2013）年 3月 27 日

編集・発行 橿原市教育委員会

印 刷 明新社（株）

奈良市南京終町3丁目 464 番地 1